ひと・つなぐ　ちば沿線版

浦安・境川発

海・まち・デザイン 堀江1丁目自治会

祭り、旧・新住民の壁崩す

8月8日、浦安市の元町を流れる境川で祭りが開かれた。船遊びや滝流し、灯籠流し……。小さな催しだが、様々な思いが詰まっていた。

漁村だった「元町」、埋め立て地の上に切り開かれた「中町」、東京ディズニーリゾートを抱えた高級マンション街の「新町」。住所表記にはない名称で浦安は三つの街に分かれている。旧住民と新住民。交わることの少なかった新町と元町の人々が一緒になって開いた祭りだった。

きっかけは、今年5月、元町にある堀江1丁目自治会の森田信雄さん(58)が、浦安の街づくりを考える新町の市民団体「海・まち・デザイン」の滝井健次さん(62)にかけた1本の電話だった。こどもの日に滝井さんたちは境川河口付近から東京湾へ出る乗船体験を企画した。3時間で270人が境川クルージングを楽しんだ。この催しが地域紙に載った。それを読んだ森田さんが電話をかけた。

「夏に境川で滝流しをやりたいんですが、色々教えていただけませんか」

護岸でがっちりと固められ、どぶ川にしか見えない境川。ここを昔のように活気のある浦安のシンボルにしようという思いは同じだった。「一緒に祭りをやって、境川に市民の目を向けよう」。話はトントン拍子で進んだ。

境川再生の思いをのせた灯籠流し＝浦安市堀江1丁目の境川

ご近所力

その一　抱いている思いが大切
その二　自分の地域から出よう
その三　異なる力を結集させる

境川再生が活動の柱

境川は、旧猫実村（現浦安市）と旧堀江村（同）の境を流れることから名付けられた。漁船がひしめき合い、川の水が洗濯や米研ぎにも使われた。漁師町浦安の生活の拠点だった。しかし、1960年代から始まった埋め立てと水門の建設、護岸工事ですっかり様相を変えた。

「海・まち・デザイン」の五十川勝さん(66)は「私たちが住んだからね、境川がどぶ川のようになってしまった。申し訳ないという気持ちがあるんだ」と話す。

このグループは2年ほど前に、新町の土地の用途変更があった際の住民説明会で熱心に質問した人たちが集まってできた。浦安の街づくりを考えようという市民団体だ。

活動の柱に浦安の母なる川だった境川の再生がある。水上交通の可能性を研究したり、イベントを開いたりして活発に活動しているが、それでも元町まで出てくることはなかった。

それは森田さんたちも同じだ。「仕事で新町に行くことはあるけど、新町の人たちと話したことはなかったね」

それぞれが壁を越えて、この祭りが生まれた。

来年の開催を参加者ら誓う

祭り当日、川岸には大勢の人が集まった。舟が灯籠を引き始めた時は「きれいだねえ」と歓声が上がったが、そのうちに消えてしまったり、水没したり……。それでも「わたしゃ、こんなの好きだね」「来年もやってね」と声がかかった。舟を操った漁師の岡本正義さん(74)も「中町や新町からも来てくれた。おれは舟が好きだから舟で喜んでくれるとうれしいね」。

この日は清掃などを行い境川復活に取り組む「ふるさと浦安かっぱ村」の人たちも飛び入り参加した。村長の宇田川敬之助さん(73)は元保守系県議だ。「境川再生には下水道整備など行政の力が必要だ。市民団体、自治会……色々な立場の人が集まれば行政を動かせるさ」と期待をふくらます。

祭りの後、「海・まち・デザイン」の人たちと森田さんたちの輪ができた。「ノウハウを交換して来年もやりましょう」。境川への思いが一つにつながった夜だった。

（堤装太）

次回は門前町として活性化に取り組む一宮町です。